

有朋自遠方来

7月11日朝のNHKテレビニュース、スタジオ102で、当館所蔵の埴輪家(写真。実物は9月4日から10月20日までの名品展に出陳。)を御覧になった方もおいでのことと思います。

それは、一昨年秋に四国松山市北郊で発見された古照(こでら)遺跡の用材を紹介する番組でした。同遺跡からは古墳時代前期の井せきが発掘されましたが、それを作っていたしがらみ(柵)を解体し、化学的調査をした奈良国立文化財研究所の報告によりますと、建築用材が一部転用されていることがわかりました。しかも、その用材を丹念に集めて行きますと、ほぼ一戸分の建物にまともな復元が出来たとのことです。

更に、この建物は従来の例にない特色を持っています。それは、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長・鈴木嘉吉氏の報告(7月13日付朝日新聞夕刊)によりますと以下の通りです。『……棟持柱を使っていることで、建物の妻(側面)には三本の柱が立ち、中央の柱は上まで伸びて直接棟木を支える構造になっていた。これは現も出雲大社に残る大社造り構造と同じで、大社造りの場合は妻の中央柱が特に太くて「うず柱」と呼

ばれ、少し外へ寄せて立ち、はりと棟持柱が十字に組み合わせられている。

そして同氏は、この棟持柱を持つ建物の祖型は従来、弥生時代の銅鐸に描かれた高床家屋や、古墳から出土する埴輪の家などに見られたが、建物としての直接的な関連資料は、この古照遺跡で初めて得られたと記していられます。規模は床下が1.15m、床上からはりまでが1.35mほどの高床建物で恐らく倉に当てられたということです。

当館の埴輪はそれが高床式であったかどうかは別にしても、日本全国に残る埴輪の家の内、棟持柱を完全に残している唯一の例であり、古照遺跡における復元倉庫とその構造を一にすると言えます。こちらは入母屋造り、屋根の上半は網代(あじろ)で覆われ、棟には堅魚木(かつおぎ)をのせています。壁面の突起は校倉造りに見られるような角材を思わせ、平壁には戸口と窓が開いています。

埴輪に見られる形象は実在した形そのままではないにしても、以上のような遺構の発見によって不明の部分を相補い、実在した姿をほぼ推定することができます。

人類の未来への夢は果しなく、また古代への夢も同様に果しなく続きます。このような遺跡の大規模な発掘が少しでも早くと望まれるのです。



埴輪家
斜正面(左)
側面(右)

季刊 美のたより No.29

昭和49年9月1日

発行 大和文華館